

『古代アメリカ』 10, 2007 pp. 51-66

## <調査速報>

# ペルー北部地域、インガタンボ遺跡第一次発掘調査

山本睦

(総合研究大学院大学博士課程、日本学術振興会特別研究員 DC、  
ペルー共和国カトリカ大学研究員)

## 1. はじめに

2006年7月下旬から9月末までの約2ヵ月半にわたって、ペルー共和国北部、カハマルカ県ハエン郡ポマワカ村に位置する、祭祀センター、インガタンボ(インカの宿駅)遺跡の発掘調査を実施した(図1,2)<sup>1</sup>。

発掘対象として選定したのは、遺跡全体の中心に位置すると考えられる基壇建造物(A 基壇)である。以下ではまず調査地の概要と調査背景、次に調査成果の概要を報告する。

## 2. 調査地の概要と調査背景

インガタンボ遺跡は、ワンカバンバ川南岸の河谷底部から一段高まったテラス状の土地に位置する(写真1)。ワンカバンバ川は、ピウラ県にある湖に端を発し、本調査対象地域を流れ、その後、名前をチャマヤ川と変えながらマラニョン川へと注ぐ水量の豊かな川で、アンデス山脈の分水嶺の東を山間部から熱帯地域へと向かって流れている。河谷底部は海拔800mから1,000mの平地が広がっているが、川の両側は山で囲まれており、一番高い山は海拔2,700m前後ある。そのため、この地域はユンガ、ケチュアとセルバ・アルタの環境帯の特徴を備えている(Pulgar Vidal 1987)。よって、河谷底部では米、カカオや様々な果物、山の斜面及び頂上部ではコーヒー豆やトウモロコシなどが高度に応じて栽培されている。

この河谷の地勢により、当該地域は海岸地域と山間地域や熱帯地域、または山間地域間を結ぶ自然の回廊のような役割を果たしている。現在、ワンカバンバ川沿いには、海岸地域と東斜面の熱帯地域を結ぶ幹線道路が通り、主要交通路の1つとなっている。

その重要性にもかかわらず、筆者が調査を始める以前には、当該地域における考古学的研究は皆無に近く、筆者の知る限り2つしか存在しない<sup>2</sup>。1つはトルヒーヨ大学の学生マラベルによる学位取得を目的とする論文執筆のための調査で、本調査対象であるインガタンボ遺跡の模式図と遺跡で収集、あるいは盗掘された土器の図面が提示されている(Malaver 2001)。また、インカ道を踏査し、関連遺跡を記録する目的で実施されたカパック・ニャンのプロジェクトにおいて、インガタンボ遺跡を通るインカ道の存在が確認されている(INC 2006)。また、この他に当該地域の考古学的情

報として地元の教諭が長年にわたって、ポマワカ村周辺で収集した考古遺物があり、これらは村の「博物館」<sup>3</sup>に収蔵されている。この中には先述のインガタンボ遺跡出土土器も含まれる（写真 2）。これを見ると、インガタンボ遺跡では、その名が示すようにインカ期だけでなく、筆者の研究対象である形成期（表 1）の活動もあったと考えられた。

一方、周辺地域では形成期に関する多くの先行研究が存在する。特に、チョータ周辺ではパコバンパ遺跡やラ・グランハ遺跡などで調査が実施されており（Fung1975, Kaulicke1975, Molares1980, 1998, Rosas y Shady 1970, Wester 2000）、カハマルカでは日本調査団によって調査データが蓄積されている（Onuki (ed.)1995, Terada and Onuki (eds.) 1982, 1985, 1988）。また、調査対象地域より東方に位置する熱帯のハエンやバグア（Miasma 1979, Shady 1974, 1992, Shady y Rosas 1979, 1987）、あるいはペルー北部海岸地域における調査報告も出されている（Elera 1992, Guffroy 1989, 1992, Kaulicke 1998）。これらの調査報告では、土器の様式的類似性などから北部ペルーにおける地域間交流の存在が示唆されている。ワンカバンパ河谷の地勢を考慮すれば、ワンカバンパ河谷が北部ペルーにおける地域間交流の中継地として重要な役割を果たしていた可能性は高い。

よって、筆者等は発掘調査を開始する前、2004年に当該河谷の遺跡分布調査を実施した（Yamamoto y Peña 2005）。この調査の目的は、各遺跡の立地と生態系との関係を把握すること、獲得したデータを先行研究と比較し、地域間関係を探ること、そして、将来的に発掘調査を行う遺跡の選定であった。

この調査では、計 129 遺跡を登録した。その内形成期に属するものは 62 遺跡で、その全てが形成期中期と後期に属することが明らかとなった。また、遺跡の形態や規模、土器の質と量から判断して、祭祀センターと考えられる 5 つの遺跡が確認された。中でも本調査対象のインガタンボ遺跡は、この地域の中心的な祭祀センターであったと考えられ、採集した土器からは、先述の諸地域との交流の存在が示唆された。よって、当該地域の状況を把握するために最適の遺跡だと考え、本発掘調査に着手した。

### 3. 発掘調査概要

当該地域には発掘調査を伴う先行研究がないため、考古学的基礎データの獲得を発掘調査の第 1 の目的とした。土層観察や遺物の包含状況、及び遺構確認を目指し、特に、基礎編年の確立のため、建築プロセスの把握とそれに対応した考古遺物の時代的変化の把握に重点を置いた。第 2 の目的は、発掘調査の成果に基づき、遺跡分布調査のデータを再検討し、当該河谷における遺跡相互の関係性を把握することであった。そして、最後に、上記のデータを総合し、他地域の先行研究と比較することで、地域間交流の動態を明らかにすることを目的とした。また、発掘作業と平行して遺跡の地形測量を行い、遺跡の全体像の把握に努めた(図 3)<sup>4</sup>。

発掘作業ではまず、基本単位として 2×2m のグリッドを組み、A 基壇上に 2 つの発掘区（A 区と B 区）を設定した。A 区は A 基壇上の主要基壇に対応し、B 区は、A 基壇上の東側部分に対応している。また、出土遺物の取りこぼしを防ぐため、掘り出した土を 9,6,3,1mm メッシュのふるいにかけた。

### 3-1. A区の発掘

A区は今回の調査における主要発掘部であり、基壇上に長短5つのトレンチと1つのグリッドを設定し、発掘を実施した(図4)。トレンチ1は、基壇の南北を通る長さ52m×幅2mのトレンチである。特に、トレンチ内で建築を検出した場合、その把握に努めるため、部分的に発掘区を拡張したので、結果としてトレンチ幅が4mになっている箇所もある。トレンチ2, 3, 5の規模は、それぞれ16×2m、10×2m、8×2mで、トレンチ1で検出した建築を把握するため、トレンチ1から東西に伸ばしたものである。また、基壇の東西を横切るように18×2mのトレンチ4を設定した。これらとは別に基壇の形状を確認するため、2×2mのグリッドを基壇の北東角部分に設定した。

発掘の結果、5つの建築フェイズが確認された(表1)。出土した土器から判断すると、古いものから第1～3フェイズは形成期、第5フェイズはチムーまたはインカ期に対応している。第4フェイズに関しては、建築は明確に認識できるものの、植物の根や盗掘、及び第5フェイズの活動による攪乱が激しく、建築に対応する遺物をほとんど収集できなかったため、不明瞭な点が多い。しかし、攪乱を免れたわずかな建築の埋土から出土した土器を見ると、形成期に属する可能性がある。

A区の全域では、表土及び表土付近の層でチムーあるいはインカ期、つまり第5フェイズの土器が出土した(図5;写真3)。特に、トレンチ1では、この時期に対応する3つの炉と完形土器を検出した。中でも炉1は、直径約2mの大きさで、精巧な仕上げが施され、炉の中からは大量の灰のみが検出された(写真4)。完形土器は、海岸部のピウラ地方やランバイエケ地方の土器との類似性を示唆している(Cárdenas et.al 1991, Shimada 1994)。また、トレンチ4においてもこの時期の堆積が認められ、部屋状構造物が検出された。ただし、基本的には第5フェイズの建築は、第4フェイズ以前の基壇を再利用しつつ建設されている。本発掘調査の範囲外ではあるが、A基壇上にはインカ期のタンボと想定される建造物があるので、儀礼的空間として主要基壇上部の一部が再利用された可能性もある。興味深いことに、第5フェイズの活動は、主要基壇の中央部に集中している。

第1フェイズの遺構としては、4つの建造物と数枚の床面が検出された(図6)。構造物はいずれも黄色の漆喰で仕上げが施されている(写真5)。これらの建築は全て地表面より5m以下に位置しており、第2フェイズの活動面より2mほど下にある。発掘作業中は、第2フェイズ以降の建築を残したため、第1フェイズ対応のレベルまで掘り下げられたのは、あくまで部分的に過ぎない。よって、当該時期の建築については、不明な点が多く、全体構造は把握しきれていない。興味深いことに、今回の発掘では、第1フェイズに対応する土器は一点も出土していない。

第2フェイズになると、大規模な増改築が行われ、基壇の規模は大幅に拡大した(図7)。基壇へのアクセスとして、基壇の北側に階段(階段2)が建設されたのもこの時期である(写真6)。第3フェイズの建造物があり、掘り下げることができた範囲が狭いため、不明な点も多いが、この時期、主要基壇の南側に小基壇が築かれ、その上に部屋状構造物が建設されたようである。また、壁の配置や土層断面、基壇の形状から判断すると、基壇上部の階段と小基壇の間に広場のような開放的な空間が配置されたと考えられる。これとは別に、トレンチ4では4本の壁が検出された(写真7)。AM48は主要基壇の東の土留め壁と考えられる。その他の3本の壁は方向軸と高さが同じであるが、これらの壁に対応する床などは何も検出されていない。また、いずれの壁も壁面が不均一で、石の積み方や仕上げなども他の壁に比べて粗い。さらに、土層断面の観察に基づけば、3本の壁は同時期の建築であると推測できる。以上のことから判断して、これらの3本の壁はいずれも、主要基壇

の建設の過程で一時的に土を留めるため、あるいは基壇内の土圧を分散させるために設けられた土留め壁であると考えられる。出土した土器は極わずかではあるが、チョータやハエン、バグアとの共通性を示し、形成期中期に相当すると考えられる（写真 8）。

第 3 フェイズは、この遺跡で最大規模の建築の増改築が行われた時期である（図 8）。この時期の建築は、全て第 2 フェイズとは異なる方向軸に従っており、階段(写真 6)やそれに対応する土留め壁が新たに建設されるなど、基壇の規模が大幅に増大した。第 2 フェイズと同様に、基壇の最上部には小基壇、その上には部屋状構造物が建設された(写真 9)。これらの部屋状構造物は全て精巧に仕上げられており、黄色の床や漆喰が施されている。この建築の遺跡全体における配置から見ても、単なる住居とは考えにくい。また、部分的に床面の張替えや壁の付け足しなどの痕跡が確認できることから、この時期を 2 つのサブフェイズに分けることが可能である。なお、基壇上部の部屋状構造物の床面下からは、形成期後期に属すると思われる半完形土器が見つまっている（写真 10）。層位や壁の配置、床面の状況などから考えて、この時期にも第 2 フェイズと同様、基壇上部には広場的な空間が広がっていたと考えられる。出土した土器は、第 2 フェイズと同様、ペルー北部の様々な地域、特にピウラ、チョータ、バグア、ハエン、カハマルカの土器との共通性が高いようである(写真 11)。また、第 2 フェイズの建築の埋土から石製品が出土しており、基壇改築の際の奉納品ではないかと考えられる（写真 12）。

第 4 フェイズでは、基壇上部に方向軸の異なる新たな建築が造られた（図 9）。しかし、基壇自体の大規模な改築はなく、あくまで第 3 フェイズの基壇が再利用され、その上に新たに建造物が建設されたようである。また、この時期の建築には、第 3 フェイズの建築とは異なる建築技法が用いられている。残念なことに、第 5 フェイズや現代の活動によって攪乱（一部は盗掘）されているため、このフェイズの建築に対応する土器は、ほとんど確認されていない。第 3 フェイズの建築の埋土から形成期の土器が出土することを鑑みると、第 4 フェイズはおそらく形成期に属すると考えられるが、今後の検証が必要である。

### 3-2. B 区の発掘

B 区は、先述したポマワカ村の博物館に収蔵されているインガタンボ遺跡出土の完形土器、及び装飾品が出土したとされる地点周辺に設定された。これらの遺物が掘り出されたのは、地表面で確認できる数本の壁によって構成される部屋状構造物の一角であり、現在でも幾つもの盗掘穴が確認できる場所である。よって、まず、土層の堆積状況を確認し、可能な限り盗掘された考古遺物のコンテクストを検証するため、盗掘穴の清掃を行った。一番大きな盗掘穴は長さ 4m、幅 4m、深さ約 2m にも及ぶものであった。清掃作業中には、盗掘された墓穴の痕跡の一部が検出され、スポンディルス製の首飾りの一部などが出土した。また、地表面に見える部屋状構造物の下にそれよりも古い時期の建築の存在を確認した。

よって、地表面に見える部屋状構造物、及びその下に埋まっている古い時期の建築を明らかにするため、清掃した盗掘穴を基点として南北方向に 18×2m、東西方向に 6×2m のトレンチを設定した。

その結果、合計 2 時期に及ぶ建築フェイズがあることを確認した(写真 13)。また、表土中や、盗掘によって堆積が攪乱されている場所からは、チムーやインカ期の土器が出土するため、これを合

わせると、計3時期の活動が想定される。

第1フェイズでは、A基壇の上部に小基壇が建設された(図8)。この建築下は全て人工的な盛り土で、A基壇を建設する際の埋土である。この埋土の下は自然の岩盤であるため、A基壇自体の建設時期はB区の第1フェイズに対応するものと考えられる。発掘では、数枚の床面の張替えが確認されているため、数度にわたって修復が行われたと考えられる。また、状態の良い部分では、壁を覆うように黄色の漆喰も検出された。

続く第2フェイズでは、第1フェイズの基壇を完全に埋めた後、現在地表面で部分的に確認できる部屋状構造群が建設された(図8)。興味深いことに、第1フェイズの建築と第2フェイズの建築の方向軸には、変化はみられない。検出した部屋状構造物は平均して4×4mの大きさである。また、幾つかの壁が付け足され、床面の張替えが数度にわたって行われた痕跡があり、修復や改築が行われていたことが確認できる。

B区で重要なのは、建築の方向軸と建築技法などから判断して、第1フェイズと第2フェイズには差が見られない点である。また、B区の建築の方向軸は、A区の第3フェイズの方向軸と同じである。A区の第3フェイズには2つのサブフェイズがあることが確認されているため、B区の第1、第2フェイズは、それぞれA区の第3フェイズのサブフェイズ1、2に対応していると考えられる。さらに、B区の出土土器とA区の第3フェイズの土器との間には高い共通性が認められ、ハエン、バグアをはじめ、ピウラやチョータの土器と類似している。

#### 4. おわりに

本稿は、2006年の発掘調査に関する予備的な報告である。これまで述べてきたように、発掘では計5フェイズに及ぶ活動が確認され、また、土器の分析からはインガタンボ遺跡と周辺地域との地域間交流の存在が示唆された。しかしながら、建築や土器に関する情報がまだまだ少なく、出土遺物は現在も分析中であるため、本稿で述べた解釈も改善の余地がある。また、建築や土器に関する情報がまだまだ少なく、放射性炭素による年代測定を行っていないため、時期決定に関しては、特に注意しなければならない。2007年には、第2次発掘調査を予定しており、コンテキストの確かな遺物の収集に努め、これらの問題に取り組んでいく所存である。

#### 【謝辞】

調査は地元自治体の協力や地域住民が暖かく迎えてくれたこともあり、順調に実施することができた。また、日本のアンデス調査団と国立民族学博物館には調査に必要な機材を使用させていただき、また、調査に関して有用なコメントを頂いた。ここに感謝の意を記したい。最後に、調査の参加メンバー、特に共同調査者であるホセ・ペーニャ氏の忍耐とたゆまぬ努力には敬意を表したい。

---

<sup>1</sup>本調査のメンバーは、筆者に加え、ペルー人考古学者のホセ・ペーニャ、カルロス・モラーレス、筑波大学大学院修士課程の金子勇太、ペルー・カトリカ大学の学生マリーナ・ラミーレス、ペルー・サンマルコス大学の学生ルリカ・ハヤカワの5名である。

<sup>2</sup>1983年に出版されたペルー北部の遺跡の分布地図には、インガタンボ遺跡が存在するが、研究が実施されたわけではない。

<sup>3</sup>地元住民は「博物館」と呼んでいるものの、ペルー文化庁に正式に登録はしていない。

<sup>4</sup>地形測量は、ハエン郡の自治体の協力を得て実施した。これによると、総面積は約17.5ヘクタールで、遺跡内に大小併せて8つの基壇、及び5つの広場が確認できる。

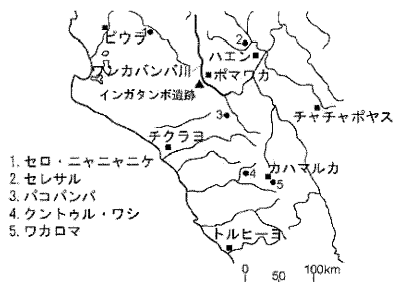


図 1:インガタンポ遺跡と関連遺跡

写真 1:インガタンポ遺跡遠景

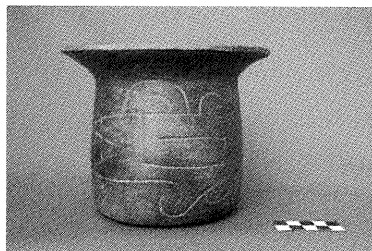
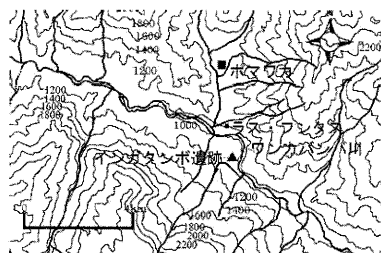


図 2:インガタンポ遺跡の位置

写真 2:インガタンポ遺跡出土土器

時期区分	インガタンポ	チョータ (パコパンバ)	バグア ハエン	カハマルカ	ビウラ
1533	インカ				インカ
1470				カハマルカ 末期	チムー
1350	第5フェイズ			カハマルカ 後期	シカン後期
1200				カハマルカ 中期	シカン中期
1100	ワリ			カハマルカ 前期	シカン前期
900				カハマルカ 中期	ピクス-モチエ
700					モチエ後期
600				カハマルカ 前期	モチエ前期
450	地方異期			カハマルカ 早期	ピクス-モチエ 前期
200					ピクス エンカンター ダ
250	形成期末期	第4フェイズ?	エル・サラ ド	EL	
400	形成期後期	第3フェイズ パコパンバ・ チャピン			パネシージョ
500			サ・ベカ		
800	第2フェイズ	パコパンバ・ パコパンバ	バグアII バグアI	後期ワカロマ	
1000	形成期中期		モレリージャ		ニヤニヤニケ
1100					
1200		パンドンチエ		前期ワカロマ	
1500	形成期初期	第1フェイズ			
1800					

表 1:  
インガタンポ  
遺跡編年図  
(仮)

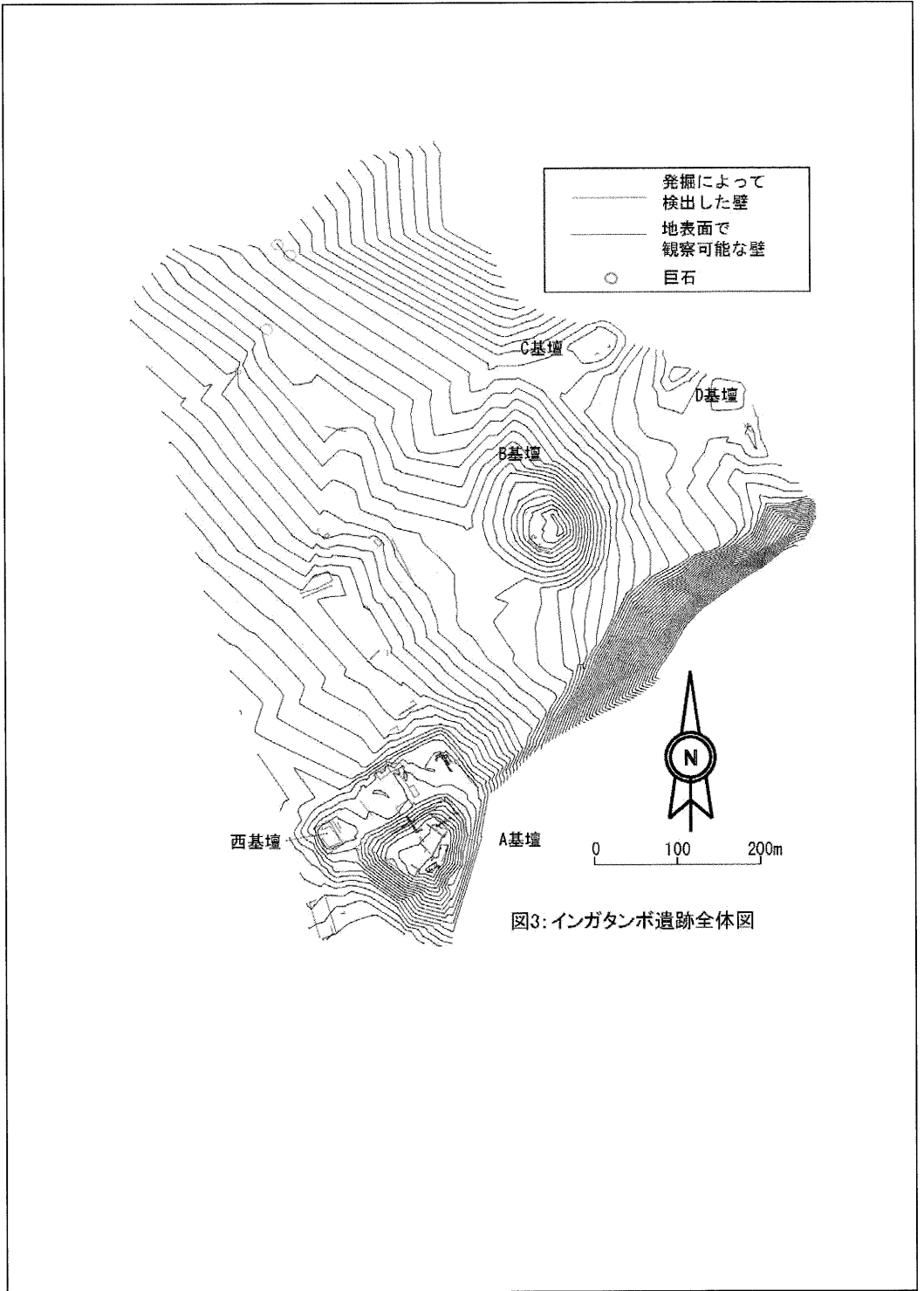


図3: インガタンボ遺跡全体図



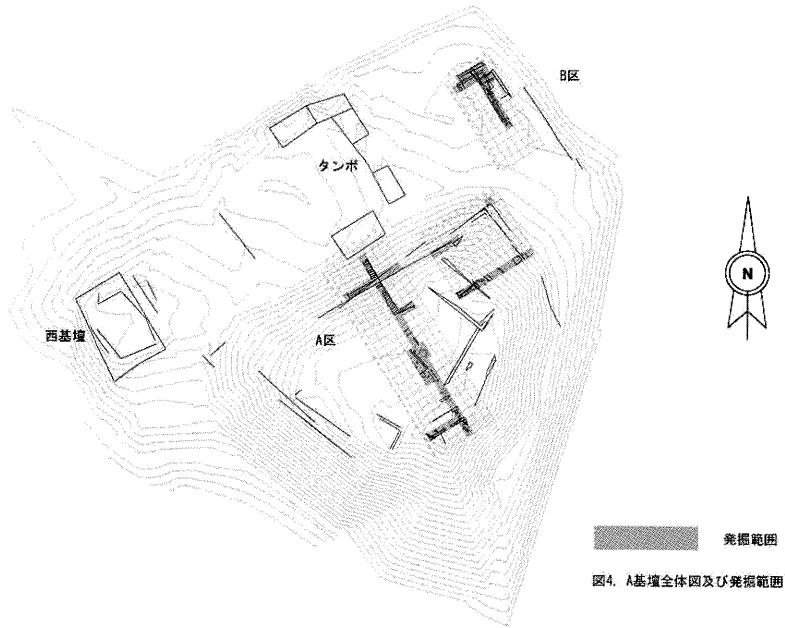


図4. A基壇全体図及び発掘範囲

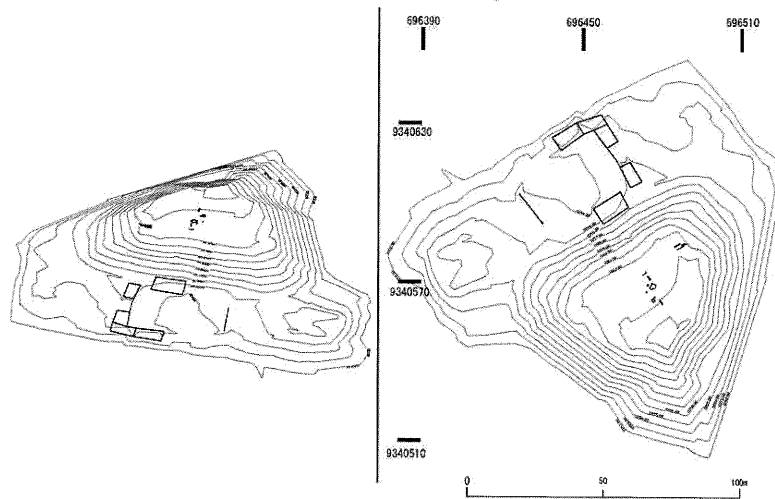


図5: 第5フェイズの建築

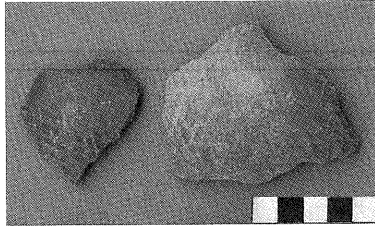


写真3: 第5フェイズ土器

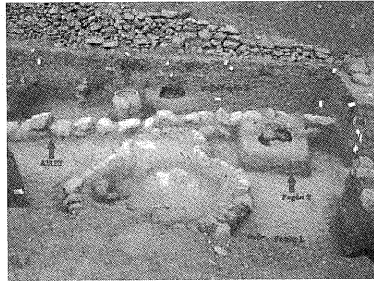


写真4: 炉及び完形土器



写真5: エンルシードの建築



写真6: 階段1及び階段2



写真7: 基壇東側の土留め壁

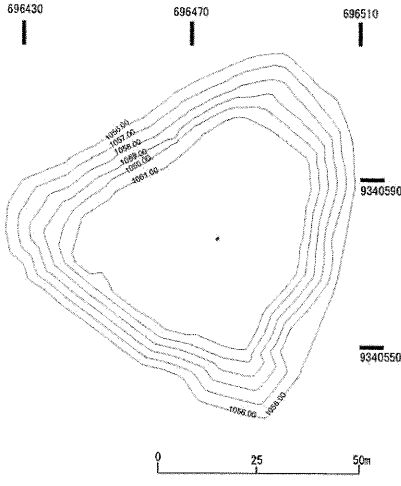
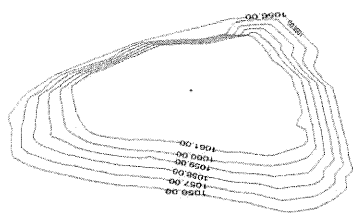


図 6: 第 1 フェイズの建築

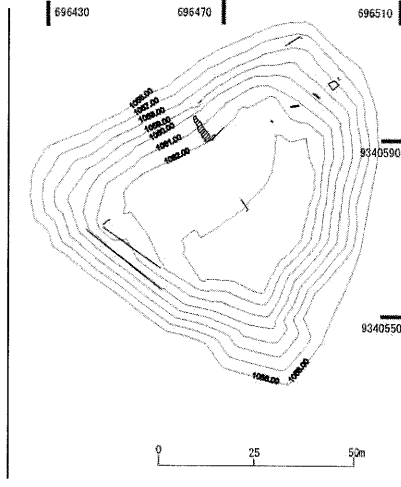
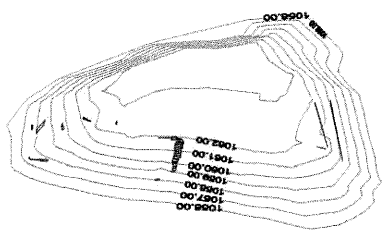


図 7: 第 2 フェイズの建築

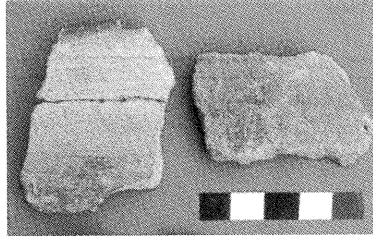


写真8:第2フェイズ土器

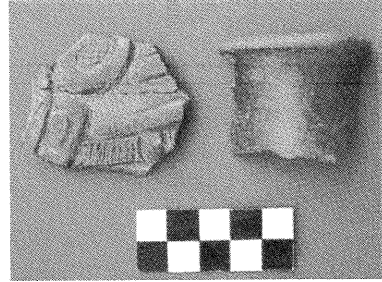


写真11:第3フェイズ土器

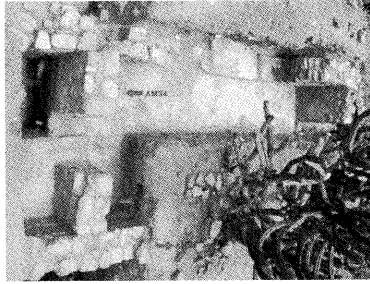


写真9:部屋状構造物

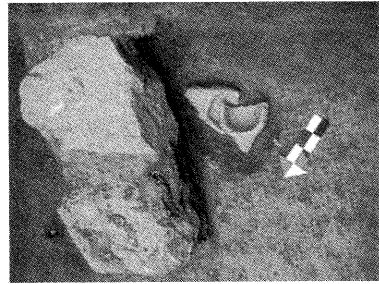


写真12:石製品出土状況

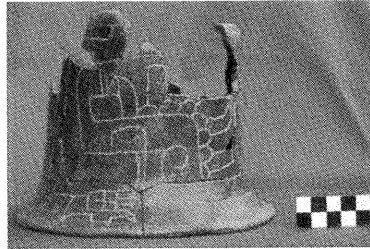


写真10:半壳形土器



写真13:B区全体写真

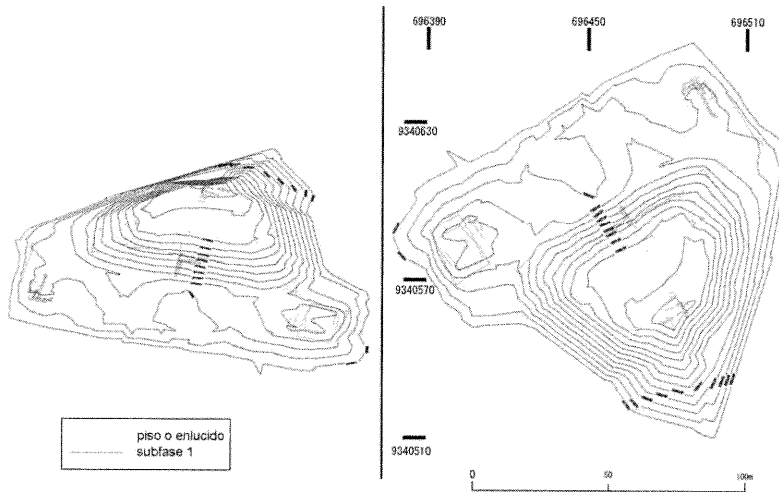


図 8: 第 3 フェイズの建築

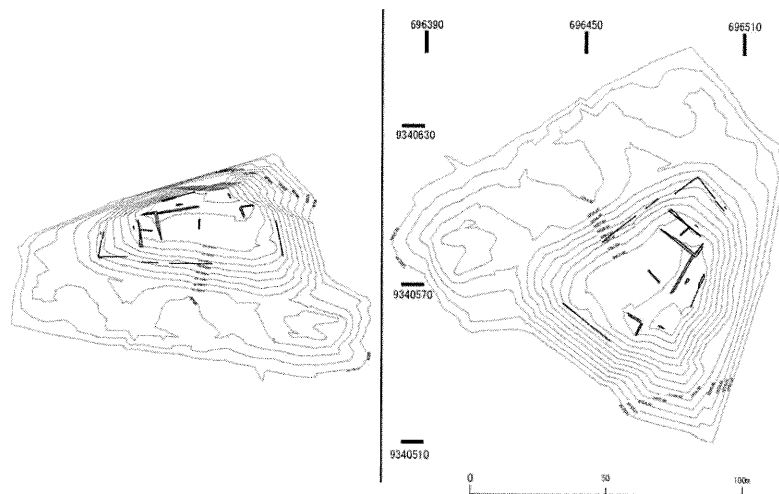


図 9: 第 4 フェイズの建築

## 参考文献

- Cárdenas, Mercedes, Cirilo Huapaya y Jaime Deza  
 1991 Arqueología del Macizo de Illescas, Sechura, Piura. Segundo Informe. Excavaciones en Bayóbar. Pontificia Universidad Católica del Perú.
- Elera, Carlos G. Arévalo  
 1997 Cupisnique y Salinar: Algunas reflexiones preliminares. In Arqueológica Peruana 2. edited by E. Bonnier and H. Bischof, pp. 120-144. Sociedad Arqueológica Peruano-Alemana, Reiss-Museum Mannheim.
- Fung Pineda, Rosa  
 1975 Excavaciones en Pacopampa, Cajamarca. Revista del Museo Nacional 41, 129-211.
- Guffroy, Jean  
 1989 Un centro ceremonial formativo en el Alto Piura. Bulletin de l'Institut Français d'Etudes Andines 18 (2), 161-207.  
 1992 Las tradiciones culturales formativas en el Alto Piura. In Estudios de Arqueología Peruana. edited by Duccio Bonavia, pp. 99-122, Fomciencias.
- Instituto Nacional de Cultura  
 2006 PROGRAMA QHAPAQ ÑAN. INFORME POR CUENCAS HIDROGRÁFICAS DEL REGISTRO DE TRAMOS Y SITIOS. CAMPAÑAS 2003-2004. Fondo editorial del INC, Lima
- Kaulicke, Peter  
 1975 Pandanche: un Caso del Formativo en los Andes de Cajamarca. Seminario de Historia Rural Andina, Lima.  
 1998 El periodo formativo de Piura, Boletín de Arqueología PUCP 2, 19-36, Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial.
- Malaver Pizarro, Manuel Enrique  
 2001 Arquitectura Monumental Formativa del Sitio Inगतambo, Valle del Río Huancabamba, Provincia de Jaén. Proyecto de Investigación para Optar el Título de Licenciado en Arqueología, Universidad Nacional de Trujillo.
- Miasta Gutiérrez, Jaime  
 1979 El Alto Amazonas, Arqueología de Jaén y San Ignacio, Perú. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Dirección de Proyección Social, Seminario de Historia Rural Andina.
- Morales, Daniel  
 1980 El Dios Felino en Pacopampa. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Dirección de Proyección Social, Seminario de Historia Rural Andina.  
 1998 Investigaciones arqueológicas en Pacopampa, departamento de Cajamarca, Boletín de Arqueología PUCP 2, 113-126, Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial.
- Olivera Quirino 1998  
 1998 Evidencias arqueológicas del períodoo formativo en la cuenca baja del río Utcubamba y

Chinchipe, Boletín de Arqueología PUCP 2, 105-112, Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial.

Onuki, Yoshio (ed.)

1995 Kuntur Wasi y Cerro Blanco, Dos Sitios del Formativo en el Norte del Perú, Hokusen-sha.

Pulgar Vidal, Javier

1987 Geografía del Perú: las ocho regiones naturales, la regionalización transversal, la microregionalización (9a edición), PEISA, Lima, Perú.

Ravines, Rogger

1983 Inventario de Monumentos Arqueológicas del Perú, Zona Norte (Primera Aproximación), Instituto Nacional de Cultura, Lima.

Rosas La Noire, Hermilio y Ruth Shady Solis

1970 Pacopampa: un Centro Formativo en la Sierra, Nor-Peruana, Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Seminario de Historia Rural Andina.

Shady Solis, Ruth

1974 Investigaciones arqueológicas en la cuenca del Utcubamba, Amazonas. Artículo Reproducido de Las Actas del XLI Congreso Internacional de Americanistas 3: 579-589, México.

1992 Sociedades del Nororiente Peruano durante el Formativo, Pachacamac 1(1), 21-48.

Shady, Ruth y Hermilio Rosas

1979 El complejo Bagua y el sistema de establecimientos durante el Formativo en la sierra norte del Perú, Ñawpa Pacha 17, 109-154.

1987 Tradición y cambio en las sociedades formativas de Bagua, Amazonas, Perú, Revista Andina 2, 457-487.

Shimada, Izumi

1994 Tecnología y Organización de la Producción de Cerámica. Prehispánica en los Andes. Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial.

Terada, K. and Y. Onuki (eds.)

1982 Excavations at Huacaloma in the Cajamarca Valley, Peru, 1979. University of Tokyo Press, Tokyo.

1985 The Formative Period in the Cajamarca Basin: Excavations at Huacaloma and Layzón, 1982. University of Tokyo Press, Tokyo.

1988 Las Excavaciones en Cerro Blanco y Huacaloma, Cajamarca, Perú, 1985. Andes Chosashitsu, Departamento de Antropología Cultural, Universidad de Tokio.

Wester, Carlos, Juan, Martínez y Arturo, Tandypan

2000 La Granja, Investigaciones Arqueológicas. Museo Nacional Brüning, Lambayeque – Perú, Sociedad Minera la Granja S.A., Cambior.

Yamamoto Atsushi y José, Peña

2005 Informe Preliminar del Proyecto de Investigación Arqueológica en el Valle de Huancabamba, Perú. Instituto Nacional de Cultura, Lima.

2007 Informe del Proyecto de Investigación Arqueológica "INGATAMBO", en el Valle de Huancabamba,

